

## 第二話 玉鬘 恋の争い

篝火

玉鬘、二十（はたち）の時の歌です。

「行く先も 見えぬ波路に 舟出して

風にまかする 身こそ浮きたれ」（玉鬘2）

「行く先も見えない波路に船を出し流れるままにわたしは漂う」たまかづら。

（スグ さすらいのテーマから幸せのテーマ）

心を尽くした御殿に住むことができ、源氏の配慮もまたとないこまやかさで、かたじけなく思われま  
す。玉鬘はお正月には源氏から山吹色と赤の着物もいただきました。（玉鬘4）

お屋敷で玉鬘は、大好きな物語を読んだり、書道やお琴の稽古をしたりして過ごします。

「お琴がうまいと評判の実の父と、一緒に演奏したい」それが玉鬘の夢です。

ただ、実の父内大臣のことを源氏や皆がよく言わないのが不安です。

「内大臣の娘達のなかでも、最近近江から来た田舎の娘が、でしゃばりで笑われているようです」  
ですから、今すぐ自分から名乗り出るのは、少しためらわれます。

「親といっても、一緒に暮らしてはいない人のそばに、いきなり行くとなると、恥をかくこともあるか  
もしれない。」（篝火1）

お屋敷に住む、源氏の奥様の紫の上様や、他の皆様も玉鬘を好いておりました。（胡蝶）  
春になると、玉鬘のよい評判のうわさが都の公達にも広まりました。

お屋敷には、「夕霧」という源氏の十五になる息子も遊びに来ます。

事情を知らない夕霧は、玉鬘を実の姉だと思っています。

「弟の夕霧です。たいした者ではありませんが、うちは兄弟が少ないので、気軽に呼びください。お引越しの時はお手伝いもできず、……」(玉鬘4) かたくるしい挨拶をします。夕霧はまじめで秀才です。また、お父さんの源氏のように色々な女に言い寄ることもなく、幼馴染の人だけをずっと思っているということです。(?)

夕霧のお友達で内大臣家の「柏木」という方もよく遊びに来ます。

実は柏木は、玉鬘の弟に当たるのですが、柏木は知りません。

柏木は蹴鞠が得意です。

桜が満開の日、柏木は夕霧や若い仲間たちと庭で蹴鞠をしていました。

皆、玉鬘のお部屋のステレにすけて見える女たちをそれとなく意識しています。

柏木は言います「桜がひどう散りますなあ。風が桜を避けて通ればええのんに」

「♡ああ、猫や」柏木は猫を好きなのです。

その時です。飼い猫の首の紐がひっかかり、すだれがすこし開いてしまい。そこから、玉鬘の姿が見えてしまいました。

夕霧が「えへん」と咳払いをして、召使の女房たちに気づかせようとしています。

(柏木の恋のテーマ)

柏木はその時から、玉鬘が忘れられなくなりました。(若菜上13)

ある時、柏木は夕霧にたのみます。「玉鬘はんに会う手引きをしてもらえまへんやろか？」

しかし、まじめな夕霧は「そういうことは感心できません」と断ります。(蛭3)

柏木は歌を書いておしゃれに小さく結んで玉鬘に贈ります。

「思(おも)ふとも 君(きみ)は知(し)らじなわかへり

岩漏(いはも)る水(みづ)に 色(いろ)し見(み)えねば」(胡蝶2)

「私の思い、あなたはんは知らへんやろうが、岩から漏れる水のように透明なあふるる思いだす」

親代わりの源氏は時々玉鬘の所へやって来ます。そして男たちからの玉鬘への手紙を読みます。その中に、源氏は弟「螢の宮」からの手紙を見つけ読んでしまいます。

「私の弟は、案外風流に書きますね」

髭黒大将の手紙もあります。ものものしい、つわもの姿の髭黒大将が、手紙を書くようすを想像すると、源氏は可笑しくなります。(胡蝶2)

「螢の宮は独身ですが、遊び人で浮気者らしいですから結婚したら苦労するかもしれません。髭黒大将は風流でない上に、奥様に物の怪がついて別れようとしているらしいです。この二人が地位や身分から言っても有望には違いないが・・・あなたの心に添わない縁談では、気の毒です。どうか私を母親のように思ってお心を打ち明けてください。」

源氏が奥様の紫の上にはなします。「玉鬘は不思議なほど人をひきつける性質ですね」それを聞いて紫の上は言います。

「玉鬘はあなたを親のように信頼しているのに、気の毒ですわ。」  
「どうやら源氏の本心を見抜いたようです。(胡蝶3)」

梅雨。ある雨の夕方。玉鬘と話していた源氏はふと涙ぐみます。そして急に玉鬘の手をとって歌を詠みます。

(しとしと雨の源氏のテーマ)

「橘(たちばな)の 薫(か)を(り)し袖(そで)に よそふれば  
変(か)はれる身(み)とも 思(おも)ほえぬかな」

「あなたの香り、思いくらべると、夕顔とおなじ。

わたしは、夕顔への恋を思い出して、こらえられません。」

玉鬘は驚きます。

「私も、死んだお母様の様に、はかなくなってしまうですよ」

玉鬘は情けなくて震えています。源氏はそつと服を脱ぎ、玉鬘の十二単の下にすべりこみます。(胡蝶3)  
「疎ましいことはありませんよ。ただ今ここでお会いするのも、前世からの縁を感じずにはおれませんが。」  
玉鬘は嫌で嫌で人が見たらどう思うだろうと、たまらなくなります。

「こんなことなら、まことの親に冷たくされるほうが、ましです。このような辛いことはない。気分が悪いです。」

伏せて痛々しそうに泣きだした玉鬘の姿を見るとさすがの源氏も謝ります。(蛍)

しかし、その後も源氏は女房のいない時にただならぬ事をいいます。

あまり源氏がいやらしいので、玉鬘は、かえって、蛍の宮からの上品で落ち着いたお手紙がとても好ましいものに思われ、じっと見入るのでした。

「源氏は変な人です。」

ある月のない夜、源氏が玉鬘に「このへんに来てください」と言います。

源氏は蛍の宮を呼んでおいて、隠れているのです。そして、玉鬘が行くと源氏は集めておいた蛍を一斉に放します。

(静かな夏の蛍のテーマ)

蛍の光でいっとき見えた玉鬘のすがたは、この世の物とも思えない美しさです。

蛍の宮はますます玉鬘を好きになり、その場で歌を贈ります。

「鳴(な)く声(こゑ)も 聞(き)こえぬ虫(むし)の 思(おも)ひだに  
人(ひと)の消(け)すには 消(き)ゆるものかは」

「鳴く声も聞こえない蛍なのに、火は簡単には消えない。私の思いはそれ以上に消えるはずもない」(蛍)  
玉鬘は、上手で気が利いた歌だと思いました。めずらしく返事をします。こんなふうに。

「♪身(み)をこがす蛍(こ)言うよりまさる思い」

髭黒大將は家で奥様を「ばばあ」と呼んでいます。一徹で融通の利かない性分で、玉鬘に熱を上げると、

二人の子供や奥様は目に入りません。家の改築の計画までしています。(藤袴3)奥様の物の怪はひどくなり、突然狂ったようになります。普段は塞ぎこんで、髪もとかず、部屋の片づけもしないそうです。

(真木柱)

それで髭黒大将は奥様が嫌いで、いつそう玉鬘に熱をあげるようでした。

源氏はしょっちゅう玉鬘の所へやってくるのが、(胡蝶・蛭)玉鬘には気詰まりです。

「物語を読むのもいいですが、お手紙も読んでさしあげなさい。物語は嘘の世界です。女というのは嘘にだまされるのが好きなんではないかね。たしかに面白いけれども、作者というのは口がうまいものですね。」

玉鬘は嫌味で言い返します。

「嘘八百をいい慣れた人は、そう思うのかもしれないね。私にはかえって物語の方が人の心のまことのように思えますわ」

「では、物語には、私のように、親が娘にふられるなんて話はありませんか。なければ、新しく親と娘の恋物語を作ることにはどうでしょう。」

「こんな道を外れた親の話は、どこを捜してもありません」

源氏はすこしはずかしくなりましたので、それ以上は乱れません。(蛭3)

柏木は、琴を引くのが上手です。ある夜、玉鬘の部屋のそばで、夕霧が笛を吹き、柏木の琴と合奏をします。

玉鬘は柏木が実の弟であることを知っているので、しみじみと聞いていました。

(琴の雰囲気柏木の恋のテーマ)

猫が開けた御簾からちらりと見てからというもの、柏木は玉鬘への思いがつのついています。

歌おうとしても、玉鬘の前では、柏木は鳴いている鈴虫と同じほどの小さな声しか出せません。「どうも私は、気をつこうててしもうて、あきまへん」おまけに琴の演奏もずっと緊張しています。

ある台風の日でした。たまたま、夕霧が玉鬘の部屋の近くを通りがかりました。屏風などはかたづけられ、見通しが良くなっています。

(不条理夕霧のテーマ)

見ると、なんと、父の源氏が玉鬘のそばにいて、玉鬘を引き寄せようとしているではありませんか。玉鬘は逃げはいますが穏やかにしています。夕霧はびっくりしました。

「いくら自分の娘でも馴れ馴れしい。いやなものを見てしまった。どういう関係なんだろう。うとましい。」(野分)

「ストーリーは原作の通りではない。(括弧)は参照した源氏物語の巻名。数字は渋谷栄一の段分けによる。 <http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/>

## 藤袴

玉鬘がお屋敷に来て一年になります。(御幸1)

(幸せのテーマ)

師走、帝の行列があります。玉鬘も見物に出かけました。実の父の姿を見たかったのです。行列は皆同じ顔のように見え、田舎育ちの玉鬘には奇妙に思われます。

実の父、内大臣がいます。姿ははなやかで堂々としています。でもふつうのオジサンです。それから、蛭の宮もいます。ふけて見えますが、身のこなしが素敵で、一見なよなよした感じながら飄々として面白いと思います。

髭黒大将はカッコをつけて派手な衣装で弓矢まで背負っています。何かいやな感じだと思いました。

夕霧と柏木もいます。若い女房たちに人気があるようです。

帝はカッコいい。源氏に似ているようです。でも、玉鬘には帝の方が余程立派に見えます。

玉鬘は迫ってくる源氏をかわすのも慣れてきました。

結局源氏は、玉鬘の将来を、他の男と結婚させるよりは、いつそのこと帝の所に置くのが適当だと思うようになりました。

「帝はいい男でしたでしょう。」凶星です「帝のところでは宮仕えをするのは、どうですか。あなたには、長いさすらいのため成人式も済ませてあげられません。今後は春日の神に背かぬように、私も不名誉なくらみはやめて、広い心で、内大臣にすべてを知らせましょう。(御幸1)

どこで知ったのか、夕霧に私とあなたの仲が疑われているようなのです。(藤袴)

帝の側室の女同士の争いは聞いているのです。こし躊躇します。しかしとうとう実の父、内大臣と

対面する時がきました。

内大臣は。

「ずっと探しておった、夕顔の娘や。早う会いたい。せやけど、今まで私に知らせなんだのは不思議なことや。ひよっとすると、源氏が愛人にしておるとちがうやろか。そして、うわさになる前に、こうして打ち明けよるのかもしれない。」などと疑っています。成人式で内大臣は玉鬘の腰結いをし、感極まっています。

「大きにご親切なことで、感謝いたします。昔は心隔てることもなくお付き合ひしておりました。たいへん懐かしいことでんなあ。今迄、玉鬘のことを私に隠されておかれた事は、お恨みいたしますなあ」

源氏は知らない振りをして答えます。「玉鬘は、よるべがなく、私の所におりましたが、実の親に探してもらえないので自分を藻屑のように思っていたのではないでしょうか。」（行幸3）  
内大臣は何も言えませんでした。

柏木は玉鬘と血がつながっているとわかりました。ある日、玉鬘にこういいます。

「あなたはんが姉やとわかり、うれしゅうございます。これぞ、切つて切れない兄弟の縁や思います。私には自信のようなものができました。いやはや、あほな告白もこれからは出来まへんが、今後はきつとおそばでお話もできますね。」（藤袴2）

玉鬘は急に変わった柏木の様子がおもしろいと思っ聞いています。

わけのわからない話をはじめます。（若菜下7）

（柏木のテーマ）

「猫はかわいいものですねえ。あなたのお好きやった猫がおったでしょう。あの猫は私の恩人、いや愛の化身です。じつは、今、あの猫は私が面倒を見させてもろてます。えへへ。毎日のよう



に世話をしたさかい、ずいぶん人なれするようになりましたで。」

柏木はいつもいつも猫を、なで、さすってかわいがっています。それだけではありません。猫が「ねよう」「ねよう」となくのが「寝よう」に聞こえます。「いやに積極的やねえ」などと独り言を言っています。召使の女房達も不審に思っています。(若菜下1)

そういえば飼っていた猫がいなくなったことを思い出し、玉鬘は気味が悪いと思いました。

夕霧は、逆に、兄弟ではないことがわかりましたが、以前のように玉鬘の近くにやってきます。まず、うその伝言を言います。

「人に聞かせられない父上からの御伝言があります。というのは、帝の色好みを、十分にご用心ください。」玉鬘にも嘘はわかります。

「弟ではなくなりましたが、私たちにもまだ共通の親戚がいますね。大宮様の喪が明ける日に河原へご一緒しましょう」

「急に、私の新しいご親戚のことを明らかにするのは、源氏様も父内大臣様も世間体が悪うございませんでしょうか」

「そうして、隠すのは恨めしい気がいたします。大人の思惑おもわくなど、かまうものですか。」夕霧はがまんできなくなりました。

(不条理夕霧のテーマ)

「同(おな)じ野(の)の 露(つゆ)にやつるる 藤袴(ふぢばかま) あはれはかけよ かことばかりも」

「同じ兄弟だったのに。恋しい涙にぬれ。しおれている藤袴。すこしでいいから。かわいそうだと僕を思っで！」

「兄弟とはいえ、言い過ぎよ。♪遠いえにしの藤袴。」(藤袴1)  
夕霧がすこしづつ近づいてくるのが、玉鬘は怖く感じます。

「いえいえ、これ以上は近づきません。私は真面目な男です。でも、帝のところへお勤めに行かれても、宮仕えだけではすまないかもしれません。それに、父上源氏ともそう言う関係なのか？隠さずに教えて下さい。男にも詳しいのでしょうか。近づけるようになった柏木だけを喜ばせるおつもりですか。わたしはまじめだから、馬鹿にされるのかもしれないませんが、どうしても私が遠い縁なのですか。」(夕霧1)

夕霧は告白してから、不安になりました。その後は、面目を回復しようと、玉鬘に色々尽くします。(藤袴)

玉鬘は、だんだんと嫌になってきています。やはり、宮仕えをしようと思うようになりました。

この頃は髭黒大将は結婚を内大臣にお願いしています。玉鬘が宮仕えをはじめたら十月だから、その前に、と思っています。

「数(かず)ならば 厭(いと)ひもせまし 長月(ながつき)に  
命(いのち)をかくる ほどぞはかなき」(藤袴3)

「普通ならば、九月の結婚は避けるのだが

私は今月に命をかけよう」

螢の宮も相変わらず熱心に手紙を送り続けています。

玉鬘はこの方だけには、手紙のお返事を書いておりました。しかし、宮仕えをするとすると、それもできなくなります。

(さすらいのテーマ)

縁はいつでも知恵を超えたもの。

男も女も、その選択をいつも説明できるとは限りません。

真木柱まきばしら

男とはこんなものでしょうか。

どうやって、私の十二単のなかに侵入したのでしょうか。

生きものが、うごめいています。

土の色の肌。毛がさわって痛い。猫のようなやさしさもない。

十二単を脱げない私は、とつくに拒否をあきらめている。

この染み付きそうなおい、女房の「弁」の奴でも取れないだろう。

男は単の中にもぐりこんでしまい 見えなくなる。足にきつく まきつく。

大蛇に巻かれるのは、きつとこんな感じだろうか。

わたしのほとを食べたいのだろうか。

飴をなめるときのように。舌で、それから口で、しつこく、くらくらいついている。

からだじゅうもう鼻水と涎にまみれている。

やがて、男の顔が上がってくる。

と、私のほとをいきなり引き裂く。

火に焼けた石でも入れたのだろうか。

わたしは痛みで声を上げる。

単から出てきた顔が、男を気取っている。

思い出した。この男は。 髭黒大将。

(さすらいのテーマ)

私は父をあこがれて育ちました。

わたしには、父も兄もいなかった。

男、というものを知らずに二十歳まで遠い九州の田舎で過ごしました。

男がどんなものだとか、男は何が好きだとか。興味もなかった。

大好きな物語に出てくる男だけを、私は知っていました。

上手な和歌を読み、官能の笛を吹く。そんな男たち。

それは・・・すてきな父の面影。

(さすらいのテーマ終)

いま、十二単から顔をだしている者は、父の匂いがしない。

間

私はいつ、どこで、こんなに傷ついたのだろうか。

その疵が男に復讐をしてきたのだろうか。

男たちを言い寄らせるのは気持ちが良い。

でも、男たちは、どれもこれも、欠点だらけ。

挙げ句の果てが、この、最悪の、選択。

でも、きっと、他の男でも同じだった。

男とはこんなものなのでしょうか。

私の夢、私の幸せ、どこを探せばあるのでしょうか。

(さすらいのテーマから玉鬘の幸せのテーマ) 終